越前府中の蘭方医学―齋藤修一郎の英文自伝補遺１―

川瀬　健一
本学会会員

１：はじめに（問題の設定）

私の母方の曽祖父・齋藤修一郎（1855－1910）は、彼が開成学校法科予科三年在学時の 1874（明治七）年 3 月に恩師グリフィス William Elliot Griffis(1843－1928) に提出した英文自伝[1]において、東京に出てきて英学を通じて西洋の学問を学ぶまでは、外国人について以下のように考えていたと記していた。

and having thought that the foreigners, of whom very little was known at least to him, were more barbarians of inhuman and cruel dispositions,
そしてこの時、彼は外国人についてはほとんど何も知らなかったのだが、外国人は、非人間的で容赦の無い性格の野蛮人であると考えていた。

この英文自伝を最初に紹介した当時は、この記述について、同じ越前府中（現在の福井県越前市）には蘭学を学んで幕末から明治に活躍した二人の人物、山本龍次郎（1839－1918）（海援隊員、県令・知事を歴任し男爵となる、関義臣と改名）・渡辺孝一郎（1848－1901）（幕府医学校英語教授・外務省大書記官・オーストリア駐在公使・衆議院議員など歴任。洪基と改名）がおり、彼らの世界に対する広い認識は越前府中の人には共有されていなかったのだろうかと、疑問を提示するに留まっていた。しかし齋藤修一郎の父で府中の蘭方眼科医師である七世齋藤策順（1822―1858）らの業績を調べてみると、修一郎が育った当時の越前府中の人々の間には、西洋が如何に日本よりも優れた面を持った強敵であるかについて、確固とした認識が共有されていた可能性が高いことが確認でき、修一郎の英文自伝における先の記述は、東京で英学を通じて西洋の学問を学んだことで世界認識が変わったということを強調した、言葉の上での装飾であった可能性が極めて高いことがわかる。
七世齋藤策順らの業績とは、天然痘を予防するために牛痘の苗を輸入し、嘉永二年十一月（西暦 1850 年１月）から越前の国全体に広げて行った、福井の町医者笠原良策(1809－1880)を中心とした事業に、彼らもまた越前府中を拠点として加わったことである[2]。

２：越前府中の蘭方医学―種痘普及以前

越前府中の町は、鎌倉時代以後越前国の国府が置かれた町で、国府の役所以外に守護となった有力武士の守護所も置かれていた。そして府中の町から西南の峠を越えた先が国府の外港である敦賀の港であった関係で、平安時代からながく中国や朝鮮との貿易港であった敦賀から、比較的早くから大陸の先進文化が流入していた。

---

1 「東日本英学史研究」第 11 号（2012 年 3 月刊）に英文自伝を発表した際には、当時の修一郎を開成学校法科一年在学と記したが、詳細な資料にあたった所、当時は法科予科三年であったことが判明した。ここに訂正しておく。
2 笠原が牛痘の苗を福井に持ち帰るまでの経緯は、吉村昭著『雪の花』（新潮文庫）が生き生きと描いている。日本への種痘伝来の全体像は、アン・ジャネッタ著『種痘伝来』2013 年岩波書店が詳しい。

この傾向は江戸時代になっても続き、関ヶ原の合戦後に越前国主となった結城秀康が福井に居城を定め、その家老の一人の本多富正が４万石余りを得て府中を居城として現在の町割りを作って以後も、中国伝来の漢方医学の面では、多くの渡来の医者が来航したこともあり、江戸時代を通じて、漢方医学の先進地であった。しかしこの越前府中に蘭方医学がいつどのようにして普及したのかということについては、適当な史料が存在していないのか、いまだ充分には研究されていない。

越前府中本多家には、享保の頃（1716－1735）より多くの医師が召抱えられ、江戸時代末には、本多家お抱えの医師が 15 人ほどおり、これ以外に町医者が 30 人ほどいたことは知られている。越前府中の町は、町人だけでも 9000 人ほどを抱える大都市で、これに本多家家中の 257 家あまりの武士と奉公人の人々、およそ 1400 名余を加えれば、1 万人を超える人口を抱える越前の国第二の大都市であった[3]。

越前府中で最初に蘭方医学を学んだ医者の一人が、8 世滝玄設である。

●滝玄設（1798－1834）

文化十四（1817）年三月京都に遊学。医学を小森玄龍[4]などに学び、多くの蘭書を書写。文政六（1819）年帰郷。文政九（1826）年九月家督を継ぐも、天保五（1834）五月 36 才で死去[5]。

種痘伝来の時期である嘉永年間（1848－53）に、この本多家お抱えの医師の中で蘭方医学を学んでいた者は、7 世齋藤策順ただ一人であった[6]。そして町医者の中でも蘭方医学を学んでいた者は、7 世齋藤策順と同門の士である、渡辺静庵（1808－80）と生駒耕雲（1808－80）の二人だけであった。三人が蘭方医学を学んだのは、京都の蘭方医師・日野鼎哉（1797 - 1850）の塾であった。

●日野鼎哉（1797－1850）

九州の豊後の国生まれで、若い頃儒者で蘭学者である帆足万里（1778－1852）の元で蘭学を学び始めた。この頃は まだオランダ語辞書や文法書もまだない時代であった。1820 年代の初めに日野長崎に遊学し、文政六年六月（1823 年 8 月）にシーボルトが長崎にやってきた当時長崎に居て、シーボルトが開いた鳴滝塾の最初の塾生の一人となり、文政十二年（1829 年）九月のシーボルトの国外追放のあともなお長崎に残って勉学を続けた。そして天保四年（1833 年）日野は、蘭学の大家小石玄瑞の後援を得て京都に移り住み、医院を開業するとともに蘭方医学を学ぶ塾を設立した[7]。

7 世齋藤策順と生駒耕雲がいつ日野鼎哉の塾で学んだのかは明らかではない[8]が、1849 年 11 月に日野が長崎から牛痘の痘痂を手に入れて、ここから京大坂、そして越前へと種痘が普及していく事業が始まった際にはすでに、三人は越前府中においてすでに蘭方医者として開業していた。七世齋藤策順は蘭方眼科医で本多家の医師、生駒耕雲と渡辺静庵は外科医で町医師として。彼ら三人はシーボルトに直接教えを受けて蘭方医学を身に付けた人物に直接教えを受けて彼らも蘭方医学を身に付けたわけで、種痘が

---

[3] 海原亮著「近世後期藩領における『医療』の展開―越前国府中を中心として」史学雑誌 112 号 2003 年などによる。

[4] 小森玄龍なる人物は見当たらない。同時代の京都伏見の蘭方医師に小森玄良（1872－1843）がいる。この人か？彼は前野良沢の門人である江馬蘭斎に蘭方医学を学び、シーボルトとも親交のあった医師で、藤林普山・小石元瑞・新宮凉庭らと共に京都蘭学の黄金時代を築いた人物で、門人は 324 名を数えると言う（岐阜県医師会サイトなどによる）。

[5]「武生医師会誌」1967 年ｐ91 と、神門酔生著「土生人脈譜人物明細解誌」1974 年ｐ34 による。８世滝玄設は修一郎の母の叔父にあたる。

[6] 生駒は牛痘種痘が普及したのちに、その功績により本多家医師となり 3 人扶持を与えられた。渡辺は同じ功績により名字帯刀を許され、町医総取締となる。

[7] アン・ジャネッタ前掲書ｐ117－118 による。

[8] 「武生医師会誌」p135 によれば、渡辺静庵が京都に出て日野鼎哉に師事したのは、33 才の、天保十二（1841）年で福井の蘭方医大岩主一に 6 年学んだ後のこと。大岩の師である日野と小石元瑞に学び、弘化元（1844）年に帰郷。天保十二年には齋藤は 19 才、生駒は 33 才。あるいは齋藤・生駒が日野に師事したのは渡辺と同時期であったのかもしれない。

越前国に普及する以前において、彼ら三人は、越前府中の町において、西洋の医学が日本のそれより優れており、ひいては西洋文明が日本のそれを上回っていることを明確に知る者たちの代表格であった[9]。

３：越前府中における種痘の普及[10]

越前国に種痘を普及させた立役者は、福井の町医者・笠原良策（1809－1880）である。彼は農家から医者になって福井藩の漢方医師となった笠原竜斎の子であるが、彼も越前府中の 3 医師と同様に京都の日野鼎哉の弟子であり、彼の種痘普及事業は、師匠である日野鼎哉との合作であった。

1849 年 11 月 3 日（嘉永二年九月十九日）に長崎から京都の日野の元に届いた牛痘の痘痂の一つが見事に発症し、この苗は次々と受け継がれて京大坂の多くの小児に接種された。1849 年 12 月 30 日（嘉永二年十一月十六日）と 1850 年 1 月 2 日（嘉永二年十一月十九日）の両日に二人の小児に種痘を行った笠原は一路雪の中を福井に向い、途中一人の小児の腕の痘を福井から連れてきた一人の小児に継ぐことで、この二人の種は無事福井の町に届けられ、1850 年 1 月 8 日（嘉永二年十一月二十五日）に福井の笠原の自宅の隣に設けられた仮種痘所において、もう一人の京都の小児の痘が福井の小児に接種された。これが越前国での最初の種痘であり、越前国への種痘普及の始まりであった[11]。

この事業には、後に笠原が福井藩へ出した書類では、計画段階から府中の 3 医師が参画しており、彼らは笠原が福井に向う途中の 1850 年 1 月 7 日（嘉永二年十一月二十四日）に種継ぎのための小児 3 人を伴って越前府中の宿に出迎えている。そして日を改めて 1850 年 1 月 17 日（嘉永二年十二月五日）。3 医師の一人渡辺静庵が 3 人の府中の小児をつれて福井の仮種痘所を訪ね、笠原らの手によって 3 人に種痘が施された。この 3 人の種が府中に持ち帰られ、府中の町に設けられた仮種痘所において、他の府中の小児たちに次々と接種されていったのである[12]。

府中における最初の仮種痘所は、平吹屋庄三郎の家に置かれ、最初に種痘を行った小児は、渡辺静庵の実子の富江と孝一郎、そして熊谷某の息子であった。この府中仮種痘所の運営には、領主本多家から年 20 俵ほどの費用が下賜され、種痘が始まった直後から、領主本多家から、仮種痘所で行われている手法以外の方法で種痘を行ってはならないとのお達しが出されていたと言われる（笠原良策書簡による）。そして嘉永四年・六年と続けて本多家より、いまだ種痘を受けていない小児の生死の別を書面にして届け出よとの命令が出され、1855 年 11 月 26 日（安政二年十月十七日）にはこれ以前の布告が再確認されるとともに、近年此の布告が軽視されていることへの警告と、新たに公設の除痘館を設けたので、今後はここで種痘を行うので、除痘館から呼び出しがあった際にはかならず種痘を受けるように領内に布告されたのであった[13]。

それでも当初はこの手法への懐疑が人々に広がっており、最初に種痘を受けた渡辺孝一郎は後年の回顧録で、「牛になるぞ」と皆から言われたと述べている[14]。しかしこれも嘉永五年（1852 年）冬の天然痘の大流行に際して、福井ではすでに牛痘種痘を受けた小児は一人も罹らなかった事実を背景にして、爆発的に除痘館に人々が殺到したと伝えられているように、府中でも以後急速に種痘が広まり、これを

---

9 越前国第一の都市である福井でも事情は同じであったと思われる。福井藩のお抱え医師の中に蘭方医師は一人もおらず、わずかに半井沖庵一人が蘭方医学を学んだ漢方医師として存在していた。福井における蘭方医学の始まりは、笠原良策が天保の初年に江戸遊学から戻って開業し、その後京都の日野の元に遊学して戻ってから蘭方医院を開業したのが始まりだといわれている。また福井藩の医学館済世館の学習も当時は漢方だけであった。

10 この項は、笠原白翁の日記『戦兢録』1989 年福井市立郷土歴史博物館と、笠原の種痘関係書簡記録集である『白神記―白神用往来留』1997 年福井県医師会などによる。

11 笠原が種継の小児二人に日を変えて種痘を行ったことは、著者が笠原の種痘関係書簡集を精査していてみつけたこと。

12 越前府中の小児に最初に種痘を行ったのは 11 月 24 日の今庄と通説では理解されている。しかし著者が笠原の日記と種痘関係書簡集を精査したところが間違いであることが判明。このこくは注 9 とあわせ「日本医史学雑誌」に投稿審査中。

13 『武生市史』資料編・府中藩政並びに本保陣屋諸記録　1968 年の「御触留用抜書」 p 488。

14 「武生医師会誌」 p 259 と「武生市史」1976 年 p 303 による。

背景にして、安政二年十月以後は、公設の除痘館となって広く種痘が行われるようになったものと思われる[15]。

４：種痘普及以後の越前府中における蘭方医学

牛痘種痘が今まで多くの漢方医師が挑んでも何ら効果のなかった天然痘に対して有効な予防法である事実が明らかになったことにより、越前府中でも爆発的に以後、蘭方医学を学ぶ者が増えて行った。

この背景には事実として西洋の医学が天然痘に勝ったということがあり、これによって、越前府中で種痘を広めた三人の医師が、領主本多家および福井藩から褒賞に預かったこともあったであろう。すでに本多家お抱えの医師であった齋藤策順は、本多家医師の中での席次が急上昇するとともに、与えられた禄がそれまでの三人扶持から八人扶持へと加増され、さらに福井藩主松平春獄へのお目見えが許された。さらに町医者であった生駒耕雲は新たに本多家医師となり、三人扶持の録を賜り、これも福井藩主へのお目見えが許された。最後の渡辺静庵は町医のままであったが名字帯刀を許されて町医取り締まりとなり、彼もまた福井藩主へのお目見えが許されたのであった。そして種痘普及で蘭方医学が注目された事を背景にして、安政二年十月に除痘館とともに設立された本多家の医学所思精館では、漢方と蘭方の両法の医学が講義されるようになり、蘭方の講師としては七世齋藤策順が任命され、助講には生駒耕雲が任命された[16]。こうした流れが若い医師たちに蘭方医学習得の機運を促したのであろう。次々と若い医師たちが西洋の医学の知識を求めて京大坂や江戸に遊学して行った[17]。

・嘉永六年九月（1853 年 10 月）、五世石渡宗伯[18]と皆川文仲が京都の蘭方医師新宮涼庭に入門。
・安政二年二月、齋藤策順の弟の９世大雲正意が京都の広瀬元恭に入門し、そこで手に入れたオランダ語の内科医書も残されている。
・安政三年六月（1856 年７月）、宗伯の末弟の石渡寛輔が大坂の緒方洪庵に入門。
（７世齋藤策順死後は齋藤家に養子にはいり８世齋藤策順を継ぐ）。
・安政六年二月（1859 年３月）、山崎良鶴が江戸の伊東玄朴に入門する。
・万延元年九月二日（1860 年 10 月 15 日）、石田快介が大坂の緒方洪庵の適塾に入門する。

石渡宗伯が蘭方を学ぼうとした動機は、漢方の限界を感じ、西洋流も兼ねることが最もだと感じたからだ[19]。こうして種痘の普及を通じて蘭方医学の優秀さへの認識が広まり、蘭方医学を学ぶ者が増えている。こうした流れを受けて、府中医学所で蘭方医学を講じる人々に、安政四年には青木仙斎、万延二年以後は大雲正意、慶応元年には三井養安などの先の三人以外の名があがるようになっていった。

種痘の普及が越前府中における蘭方医学の拡大を生みだしたのであり、このことは蘭方医学を学んで医者となった人々や、この新たな医学を受け入れた越前府中の町人や百姓、そして武士たちの間に、西洋医学の優秀さ（これは西洋文明の卓越性といっても良い）を広く知らしめて行ったと言える。

５：越前国における西洋学術の移入[20]

そしてこれは何も医学の面だけではなかったのである。

---

15 齋藤修一郎が生まれたのは 1855 年８月 22 日（安政二年七月十日）。従って彼は確実に牛痘種痘を受けている。
16 福井でも、安政三年（1856 年）からは藩医学校である済世館で漢方蘭方兼学が始まっている。
17 海原亮著「江戸時代の医師修行」吉川弘文館 2014 年による。同書は石渡・皆川の遊学の様を詳しく考察している。
18 五世石渡宗伯は齋藤修一郎の母の従弟である。
19 海原前掲書。ｐ104.
20 この項は、三上一夫著『幕末維新と松平春獄』2004 年吉川弘文館などのよる。

時はすでにアヘン戦争による清国の敗退と、アメリカペリー艦隊来航による開国で、日本が西洋列強の侵略に怯え、これに備え始めた時期であった。福井藩ではすでに早くも西洋軍学を取り入れ西洋式に軍隊を再編成しようとしていた。

・弘化四年（1847 年）春、藩砲術師を江戸の高島流砲術家に入門させ洋式砲術と銃陣調練を研究させる。
・嘉永元年（1848 年）八月、江戸から洋式大砲鋳物師安五郎を招き、西洋砲を多数製造させ、三国の鋳物師にその技術を学ばせる。嘉永二年三月―六種十一門、夏四門、六年六月九門製造し、沿岸に配備。
・嘉永六年（1853 年）九月、江戸の鉄砲師松屋斧太郎にゲベール銃製作を命じる。⇒技術資金不足で量産に失敗。
・安政四年（1857 年）正月、佐々木権六・三岡八郎を頭取に任じ、本格的兵器生産を命じる。⇒明治維新直後までに 7000 挺の洋式銃を製造。
・嘉永三年・嘉永五年・安政元年・安政四年と、藩の軍政改革を行い、弓組や長柄槍組を西洋式銃隊に編成替えを行い、福井藩の軍政を西洋式に編成していった。
・嘉永六年（1853 年）九月の幕府による大船建造禁止の解除を受け、洋式船の建造に着手。
・安政六年（1857 年）に一番船が竣工し、一番丸と名付けられ、藩用船として活躍。

これに伴い、西洋学術の習得も進められた。
・安政二年（1855 年）六月、藩校明道館を開校。
・安政三年（1856 年）、橋本左内を登用して学制改革を実施。
・安政四年四月十二日（1857 年 5 月 5 日）に洋書習学所が設置され、西洋諸国の長所を学んで我が国の科学に足らない部分を補足し我が国を万国に優れたものにすることは、尊王攘夷において肝要であると定められ、学ぶべきところとして、兵器・軍器・医術があげられている。
越前府中でもこの動きは起きていた。
・安政元年（1854 年）十一月、福井藩から本多家へ軍制改革のため重役の福井への出張が命じられ、今後軍制は西洋式に変更と命じられる。軍制改革の頭取には 23 才の松本右馬丞（晩翠）があたり、安政五年までこの軍制改革は続いた[21]。

６：広がる海外への関心

こうした動きの中で、越前国から日本国内、さらに海外に留学して洋学を学び、さらに英語を身につけて西洋の諸学を学ぼうとする動きが起きて行った。

・福井藩の瓜生寅（1842－1912）。
万延元（1860）年長崎に赴く。文久元（1861）年長崎でウィルリヤス・フルベッキ両氏に英語を学ぶ。文久二（1862）年九月長崎の幕府英学校教授。慶応三（1867）年福井で英学塾を開く。のち藩校英学教授。明治三（1870）年大学南校助教。明治四（1871）年南校事務掛[22]。
・福井藩の日下部太郎 （1845－1870）本名八木八十八[23]。
慶応元年（1865）年瓜生に連れられ長崎に留学し、フルベッキの英学塾に学ぶ。慶応三（1867）年二月。福井藩の命を受け米国に留学。ラトガース大学に学ぶ。

---

[21] 松本秀彦著「父の思い出そのほか」1971 年私家版 p 16－18 による。松本晩翠は後に本多家主席家老となった人で齋藤修一郎の父七世齋藤策順の従兄で著者の母方の祖父松本均の父。
[22] 山下英一著『グリフィスと日本』1995 年近代文芸社刊、『グリフィスと福井（増補改訂版）』2013 年エクシート刊。
[23] 山下英一著『グリフィスと日本』1995 年近代文芸社刊、『グリフィスと福井（増補改訂版）』2013 年エクシート刊。

・府中本多家の山本龍次郎（1839－1918）
分家で福井藩士の山本匡輔の養子となる。安政二（1855）年福井藩藩校明道館入学。安政五（1858）年五月明道館幹事（橋本佐内ら）御用手伝役。文久二（1862）年江戸昌平坂学問所入学。勝海舟らと時勢を論じる。慶応元（1865）年蝦夷巡視。慶応二（1866）年長崎滞留。坂本竜馬と会い海援隊員となる。慶応三（1867）年七月。イギリス船でイギリス密航を図るが失敗[24]。
・府中本多家の渡辺孝一郎（1848－1901）
医師渡辺静庵の長男。安政三（1856）年府中立教館入学。医学校済世館でオランダ語習得。元治元（1864）年下総佐倉の蘭医佐藤泰然塾に移り講師。慶応元（1865）年江戸の箕作麟祥塾・福沢諭吉塾で英語を学ぶ。慶応二（1866）年幕府医学校英語教授。慶応四（1868）年会津藩・米沢藩英学校を開設[25]。

７：まとめ―斎藤修一郎の幼年青年期は西洋への関心が広まった時代

以上のように越前府中における蘭方医学の発展を中心に越前国での西洋への関心の広まりを追っていくと、この過程は 1855 年 8 月 22 日（安政二年七月十日）生まれで明治三（1870）年三月に沼津の旧幕府静岡藩の沼津兵学校付属小学校に入学し英学を学び始めた齋藤修一郎の幼年青年期にぴったりと重なり、しかもその主要な人物の多くが彼に密接な関係を持っていた人であった。西洋による侵略の危機感の広がりと種痘法の広がりによって、少なくとも越前国においては、知識人ならだれでも、西洋が日本よりも強大で優れた学術をもった国であることは十分に知られていたと言えよう。

この状況で齋藤修一郎が、西洋人が「非人間的で容赦の無い性格の野蛮人であると考えていた」とは思えないのである。

事実、彼の自伝『懐旧談』には、彼が幼いころから留学の志を持ち、叔父から蘭語を習っていたと語っている。

・「元来自分は十三四の頃から既に遊学の志を抱いていたのであるが、ついにその機会を得ずして今日まで延び延びになって来ていた。それが一朝事熟して遂にその素志を達したことであるから、その落ち着く先が江戸であろうと、沼津であろうと・・・・非常に満足であった」[26]
・「もっとも郷里にいた自分から大雲叔父上より蘭書について文法の入門二三枚も習ったことがある」[27]

英文自伝において彼が、「外国人は非人間的で容赦の無い性格の野蛮人であると考えていた」と記したのは、彼の教師たちの期待に応えたものであった可能性が高い。

---

[24] 越前市編『越前市史資料編 24 明治維新と関義臣』2012 年刊。
[25] 文殊谷康之著『渡邉洪基伝―明治国家のプランナー』2006 年ルネサンスブックス刊。
[26] 齋藤修一郎著『懐旧談』大正 6 年武生郷友会再刊。 p 37。
[27] 齋藤修一郎著『懐旧談』大正 6 年武生郷友会再刊。 p 38。

資料：齋藤修一郎年譜と越前における洋学普及

齋藤修一郎のあゆみ	越前福井藩における洋学普及	世の中の動き
	弘化三年（1846）笠原良策が福井藩に牛痘苗輸入を嘆願。	1840～42 アヘン戦争。
	弘化四年（1847）春、藩砲術師を江戸の高島流砲術家に入門させ洋式砲術と銃陣調練を研究させる。	
	嘉永元年（1848 年）八月、江戸から洋式大砲鋳物師安五郎を招き、西洋砲を多数製造	
	嘉永二年（1850）十一月。福井仮種痘所に、最初の種痘実施。	嘉永六年（1853）六月ペリー来航
	嘉永四年（1852）十月。福井に藩営の除痘館が設けられる。	
	嘉永六年（1853 年）九月の幕府による大船建造禁止の解除を受け、洋式船の建造に着手。	嘉永七年（1854）三月日米和親条約締結
安政二年（1855）七月修一郎誕生	**安政二年（1855 年）**六月、藩校明道館を開校。**十月府中でも「藩営」除痘所ができる。**	安政三年（1856）八月アメリカ総領事ハリス下田に着任。
	安政四年（1857）正月洋式銃製造を本格化させる。四月に洋書習学所が設置される。福井藩の軍制が洋式に再編成される。	
安政五年（1858）九月齋藤策順死去。	**※このころ越前から諸国に蘭方医学修行のための遊学が盛んとなる。**	安政五年（1858）七月日米修好通商条約調印。
	万延元年（1860）瓜生寅長崎に遊学。	万延元年（1860）三月大老井伊直弼暗殺。
	文久二年（1862）瓜生寅幕府長崎英学校教授となる。	文久三年（1863）五月長州藩が外国船を砲撃。七月薩英戦争。八月政変。
元治元年（1864）家督相続	元治元年（1864）渡辺孝一郎佐倉の蘭学塾に移る。	元治元年（1864）七月禁門の変。八月第一次長州征伐。四国艦隊下関砲撃。
慶応元年（1865）立教館入学	慶応元年（1865）渡辺孝一郎江戸で英語を学ぶ。日下部太郎長崎で英語を学ぶ。	慶応元年（1865）五月第二次長州征伐。
	慶応二年（1866）渡辺孝一郎江戸幕府医学館英語教授となる	慶応二年（1866）七月将軍家茂死去。十二月孝明天皇死去。
慶応三年（1867）府中領主本多氏の前で経書を講義。	慶応三年（1867）瓜生寅。藩校英学教授となる。山本龍次郎イギリス密航を図る。日下部太郎アメリカのラトガース大学に留学。	慶応三年（1867）一月睦仁親王践祚。十月大政奉還。十二月王政復古。明治元年（1868）一月戊辰戦争。四月討幕軍江戸入城。
明治三年（1870）三月沼津兵学校付属小学校に入学		明治二年 1869）六月版籍奉還。